



手 13  
4417





チ 13  
4417

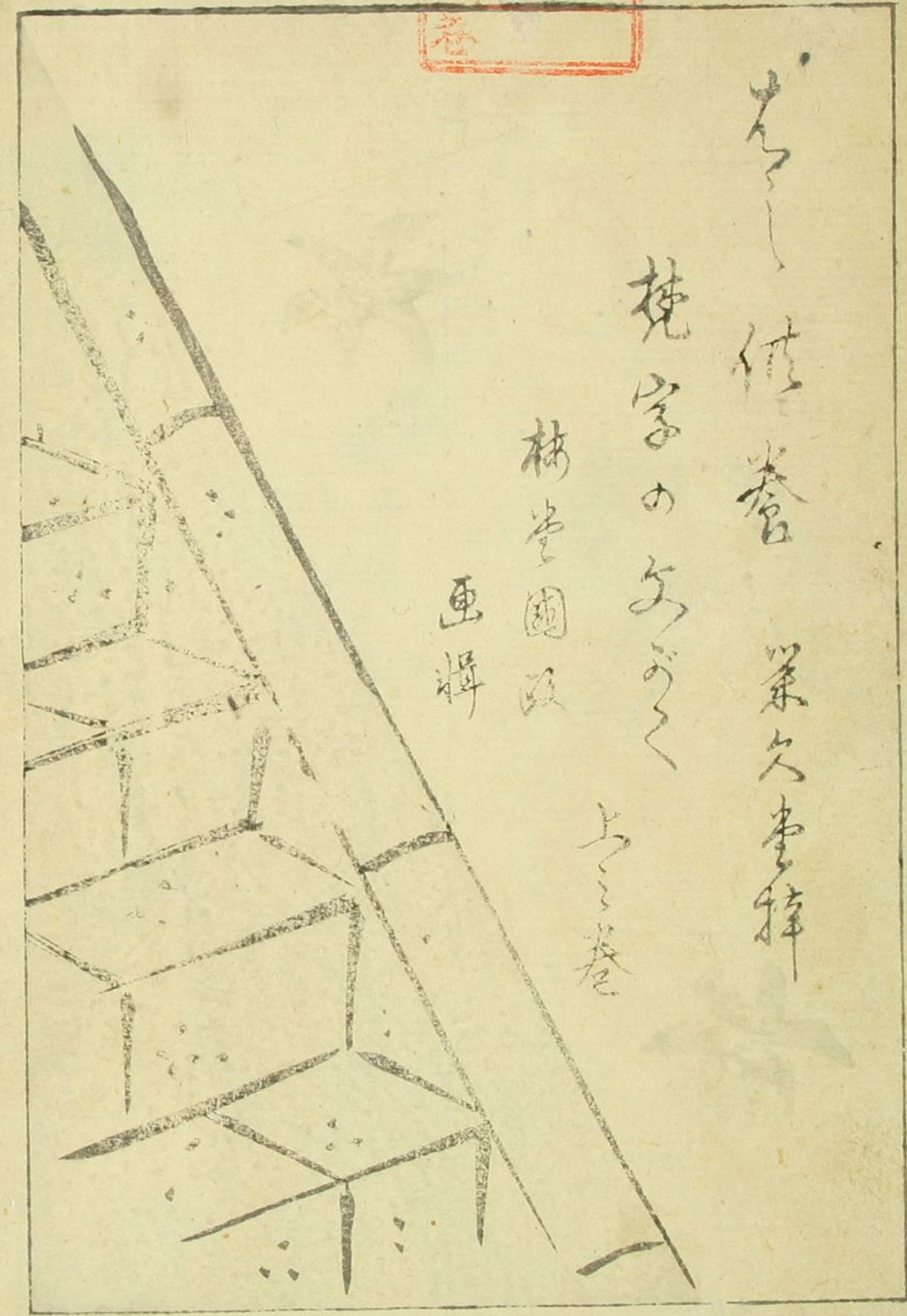
梅堂國政 筆欠奉拜

梵字の文のうゝ

梅堂國政

画掛

うゝ巻



本舞臺三巻の間の巻より中の巻まで盛を直発心乃  
由來并に袈裟所前の貞操鏡は間小平家の忠臣上徳  
の五良兵衛忠光の忠死を藤將監持を義心の討死松  
あり下の巻へあり藤部家の奇襲しの縁初りを續て魚屋  
宗五良が禁治の破道かぶさあをれ世の玄関口より負書  
院の廣河を主計之助が改心の密話誅を照毛神明の祭小  
て局を猪ひりのもの口繪の所時代物の記が盛衰記  
の繪様ありうゝ都々此冊子市村屋の正木小准紙の音  
ふゝ幕明々

明治十六稔五月

梅堂國政記



天守二



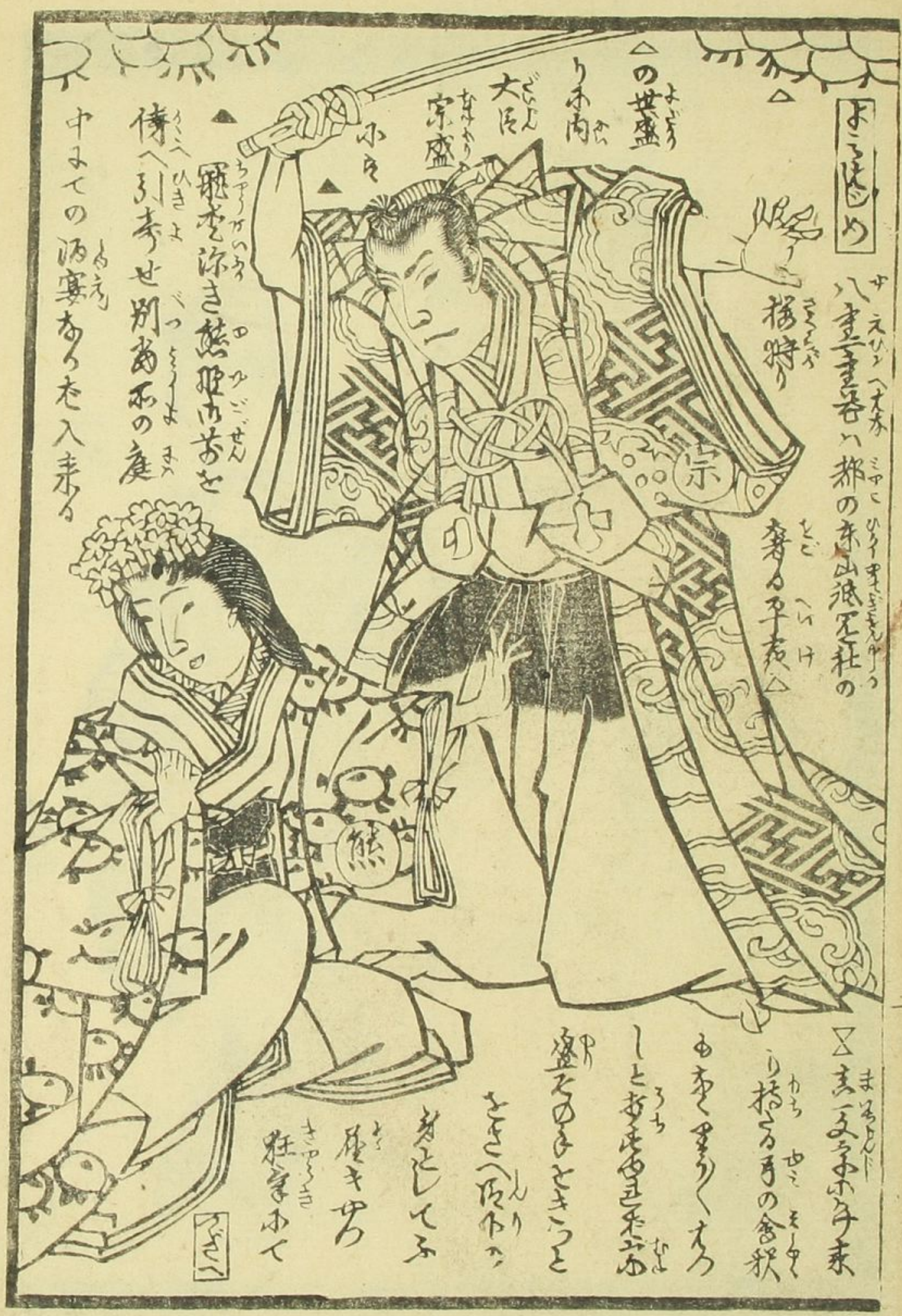






忠光  
甲冑  
忠と  
かた

乳母の衣川が 田 ぶらあろとあゆ  
おむを思ふ体 日のまり 鹿ふま村と久  
玄由良業口 ころあへ上流の五良  
あがしき 清



△の世盛  
り内  
大長  
宗盛  
小  
飛を泳ぎ慈母あせ  
侍へ引考せ別あふの庭  
中よての酒宴あつた入来る

△まふ子  
り持る月の倉状  
ゆあきまりくすろ  
しとおほほまふ  
盛そのひとまふ  
ささ(阪)  
身にして不  
屋キヤ  
狂言あて











下き 一夕の款子らん虎と  
 存じ本志は右光村ま  
 の没田を乞信只今  
 本陣仕まバ  
 君お八郎の  
 守護職をば  
 行委子柱をせとす奉  
 引つきの心はけしハ連を  
 勇々後武士あり  
 夕の津の空の流  
 辺の橋若る後もふぞ  
 成程の流り初と仮



△じやくん小父將監勤尚  
 してらしめのおろ告来る  
 ちかへ実赤勢が責入也於  
 の發利檢をりま  
 老臣と竹小架  
 御容を禮お達  
 去て將監の  
 心け之故を  
 退くんと  
 せり血争の  
 成盛をを番  
 匠水徳か

家の内にて湯室を罷きまを  
 物監掃を敷ふ波辺且  
 諸寸小親武を親ふ  
 その雨へ香羽の望より  
 なるぐと中女松ヶ枝と  
 竹まつと袈裟四角八角ね  
 裏と豆と妻ふイ香竹の純  
 えしと眼む女文中し  
 ろ小何ふ香竹を袈裟  
 又男ひをかけはしや令  
 とうむ香竹あふ志慕  
 の念の志中らぬあう



持 近の棟梁  
 持 近の棟梁  
 持 近の棟梁  
 持 近の棟梁











つぎ 江戸子産し考る ● 御年方ハ近且不明  
 小方は双方の嫁と嫁との内侍を皆履ひ奉  
 取戻しさらりと孫切て ちせむらひ入り奉り  
 平奈の味方小まいらん ちせむらひ入り奉り  
 不存嫁が奇道具拵系せしといし  
 包まハ後の月志重さな是ハお祓と  
 勇むおくら札領はお志の奉るの  
 毎いこままふふと  
 指まハ残柄に  
 てい行く六破  
 羅ハ右源氏の勢  
 責入りしと住居の 凶分とと由あり  
 後入様の怨逸念  
 進め味方口



軍法八陣双六

いんげんのそまをまじりて  
あつてあつて

宮本二刀傳實録

厚本二冊の袋入  
前編後編の切

上總木綿小紋單地

一名 越前守の市を唐化  
てい中とらふ井甚原のいにて  
あつてあつての山布らとあつてあつて  
あつてあつてのいんげんを唐化  
あつてあつてのいんげんを唐化

假名手本忠臣藏

右司乃新刻  
入厚より一層也

繪本頼朝一代記

全四  
面乃雪

川中島田陽軍記

全同

加々見山故郷錦繪

全同  
大貝  
中貝  
小貝

地本草紙問屋

江戶芳町  
親父橋角

灸山本屋平吉板



三冊讀切

暈グサ

舗月雨さつきのみま

新皿屋あんなまぢ

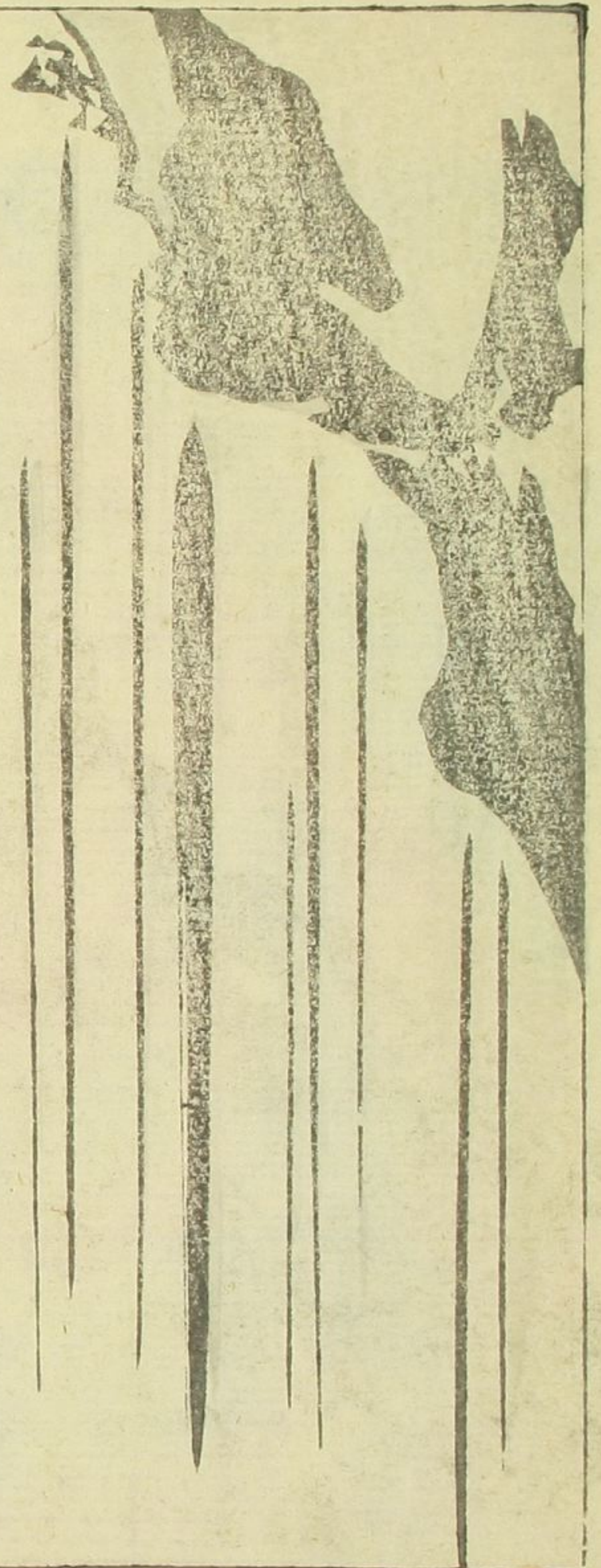
覺グク

梵字文おんどもん

橋供養はしのくぢ







橋依巻梵字文寛

新やら中き月の

雨軍中巻

梅巻玉改画梅

景久巻山本梓

上の巻をちきとひ移し柳羅の街く川邊を  
 浪小内侍を右にめとして團所を  
 の兩人竹下屋ぶその中を  
 右光の呂礼調ふおま  
 たりとねの香を再  
 をまほして吹居るが思  
 ひん一りの牌光をさし  
 頼一運力を多放(案左) 木  
 て覚明の体人く是を尋ね  
 若き息をちつとつさ(式さ) 木  
 ぐまぐま空をあり雨後の  
 味方揚初とせしは流苦  
 味は(一)押あせまき味方

◎の放北品  
 士川小の  
 合戦の跡を  
 今討死を  
 へき面を  
 今日迄  
 生垣

味方  
 味方

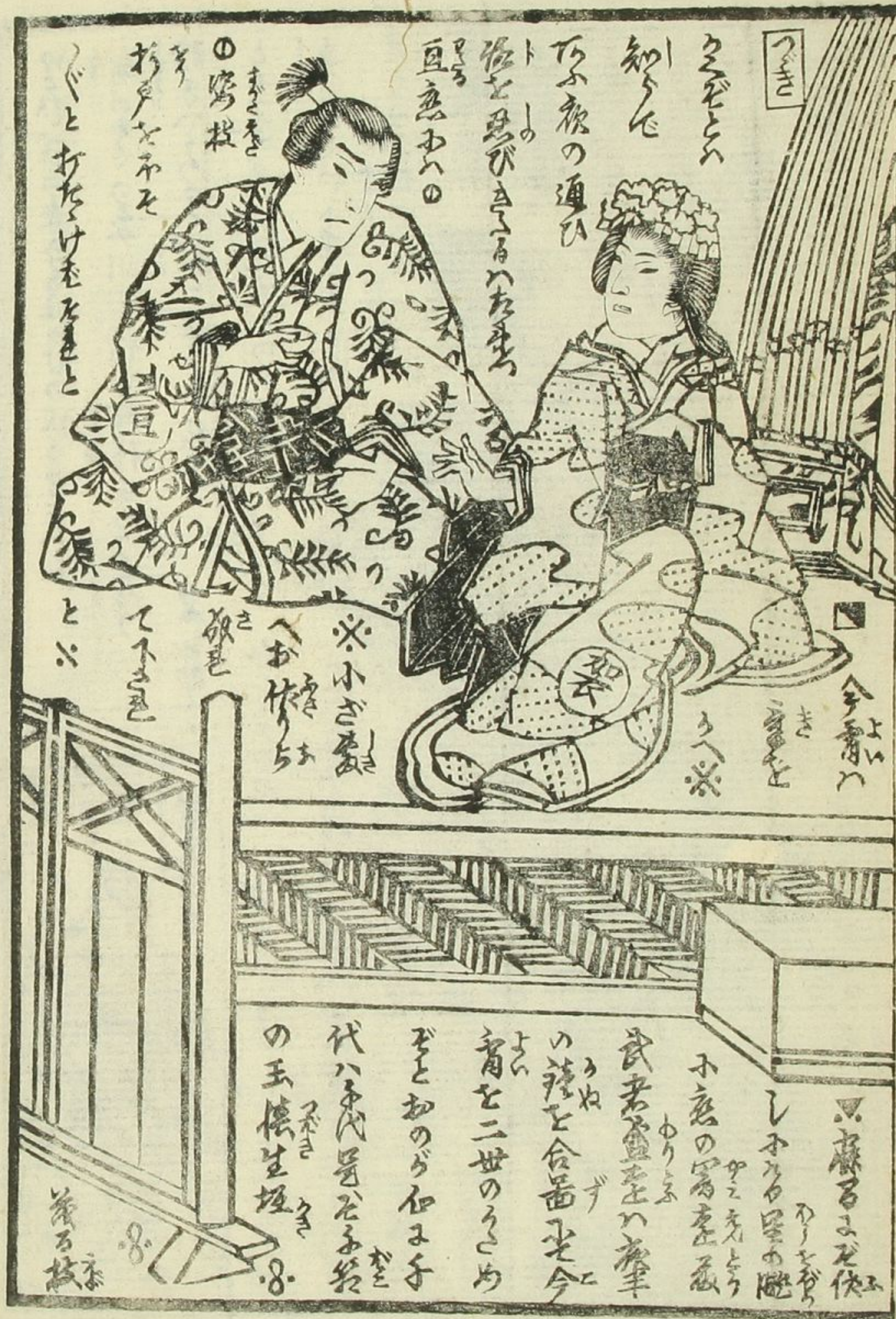












つぎ  
 夕雲の通ひ  
 後を思ひまゝなるは  
 直意の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心

※小ざら  
 へお作り  
 ていさ  
 と

只藤原よ伏  
 し小の屋の  
 小の屋の  
 武老の  
 の藤と合  
 音と二世の  
 ぞとおの  
 代ハ  
 の玉懐



夕雲の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心  
 夕雲の心

直を別  
 つその  
 燈大  
 夕雲の心

おの  
 へは  
 ぬき  
 おの  
 新  
 下  
 ひら  
 何  
 く  
 夕雲の心







つきせつ小女覚といふ話  
と賜りけりは門又



下りかの院

伊多の園

△が誰人  
せし胡蝶  
の内侍の  
とこかりり  
とこ目  
士あ  
経歌のむえあさのこませ  
ととんととせしめ  
くぬま本小内  
侍の下をを立



宣を彩朝へ  
せし由へ小遊を  
そのせりありして源氏の  
味方能る小父の持事へ  
平家へ味方の去り行率  
お家へうきぬ浪人の  
能とあふんが為渡  
辺の橋住重小  
加家装束はあむむとい  
の意算ふ不存か  
りとして親人の勘當らけしあぞむ  
とせめて平家へ心をよせ討死

いぞ候は洞小倉の移り向ひ門  
はふあふあふあふの細平を石田の陳  
匠本能がじろあり  
引戻し七  
まの肉小  
下ふをふあり  
さふをえん小倉  
をの細平を以刀小  
切を

















なきがあくむらん  
 の清名由雲きう  
 と候ぬ晴まは  
 成小の平実  
 中もなき靈  
 後うあと  
 合掌して  
 礼母の取活  
 の幕切て是  
 ろ二高目好  
 り左板小下え  
 たりたり

# 赤穂義士百人一趣

柳下亭種員著

豊國翁遺稿

厚中本一冊

近刻

此書は我士銘外にも哥俳を集めてく傳記をあやう

榮久

## 繪姉妹姿見草紙

芳巖画

## 白養美人香

刊行

解城の屋

## 玉菊物語

曾文作

一名からくまのり  
 一巴 銀三  
 半包 一取五下

板目

井筒

## 若葉梅屋名様櫛

三巻

## 山本平吉板

西遊記  
 北太郎  
 尾高傳

## 椿説鬼魅談語

初編 九編

為永春水著作  
 梅蝶樓國貞書





梅堂國政著

同 画圖

下

栄久堂山本梓





橋竹卷梵字の

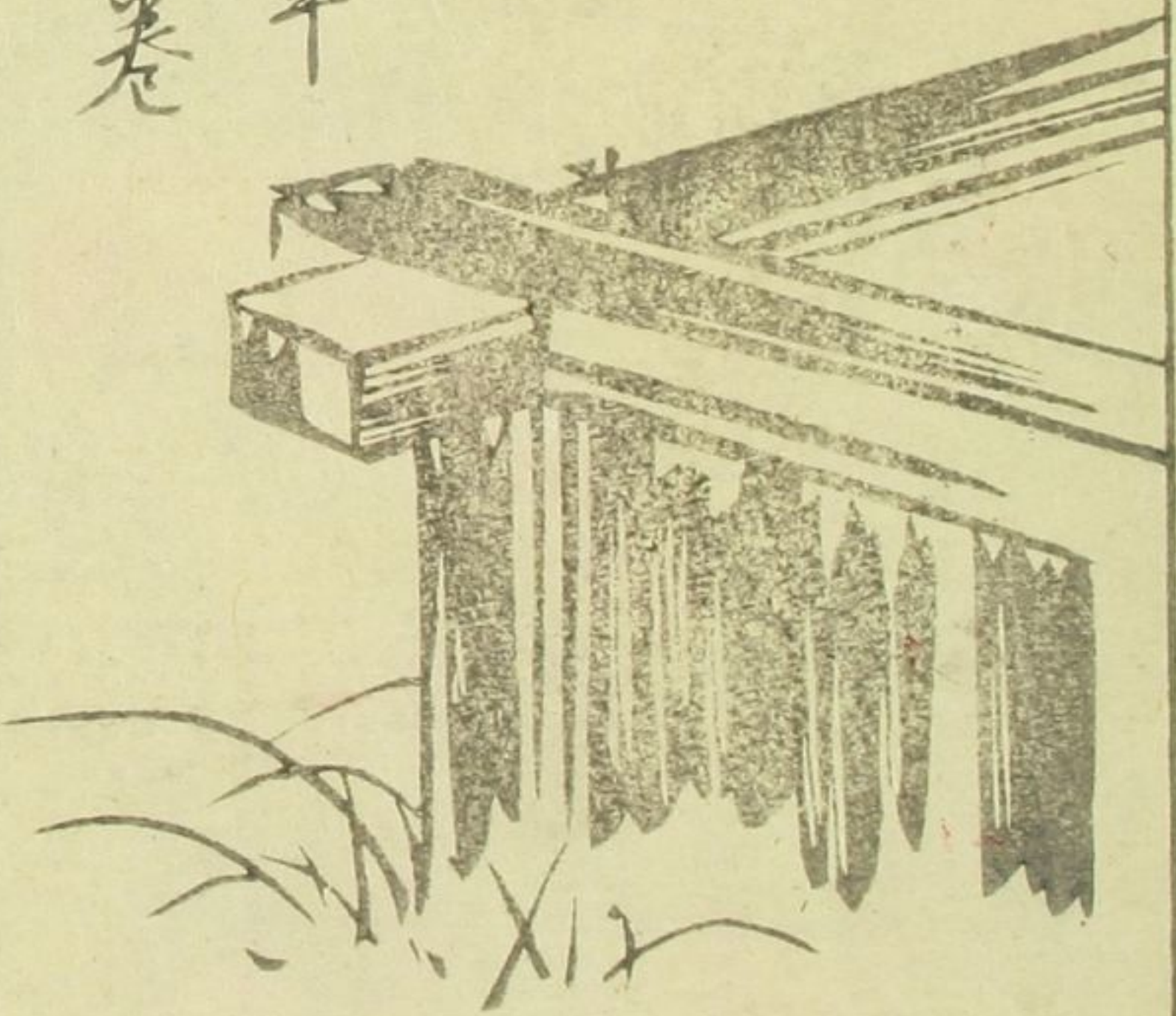
と舞の巻

新四屋舗

月の雨暈

下巻

梅雪玉改玉輝  
栄久堂山本梓



天 堂

天 堂

樹木の色

びきし無天堂

の辺り近之思ひ

のる或流のたうえ但獨

ハムト父吾を夫の企テ由

春の殿を押しあて幼年ある

※君叔の家智とて世後見

職守春田と押領

おまゝの邪ヲおまゝのハ

浦を兄ガ

著

このてんとうの

口以典範ハ殿の玉

お著ふぞろこん

典

○ニゼシ

由Siro

さうぬ

つゆぬ

さるが

殿うの

づりし井

戸の葉

と盛をかし

と盛をかし

是れを隠

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし

と盛をかし



聞きぬ若新なじと 回見を母母ひと敷きつつけきる意中もゆりの浦元て  
 西幸年確の袋の中 正体の衣集ふ懸帯を 其の衣と集ふく 進きる曲柄小引  
 即ち怖ノ打をとりきぬ 解きそちおやと 遠い言  
 今方お若の初屋へ さけぶ声何す 吾方  
 悲び入るその時お是 ありうと夜後 支那  
 へまろる何物めを返す の後浦元の才 改三郎  
 ちうまゆお若し策 紋三郎が  
 確お期さくは世に 紋三郎が  
 うあは致せ 紋三郎が  
 けおれを照し 紋三郎が  
 てとるが 紋三郎が  
 服いせと 紋三郎が



兼又堂の幕下へ又拾ひ 実の汚名をうけ  
 下へ隠し居るとい 多うお若の次格と申  
 白旗の力ありたる 立々浦元の自滅とをうけい じる拍の内筋屋  
 さへ周猫の居ぬと 是道ありる振舞ひ ぐご必  
 何んとて為ね来る ありの巻巻を其の 田  
 お若の袋を色と回 新屋お若をうけ 田



おあきと  
 にその梅  
 治由梅子  
 と喰み春  
 首尾  
 つかと侍おふ  
 改へ

















きんちや  
 宗  
 中りあふ金  
 苦ひ満を内へ

△きんちや  
 へきんちや  
 てあふ金  
 多き  
 多き  
 多き

△きんちや  
 三百  
 多き

この七親  
 四人分際を  
 何なり親父  
 の福を金の全  
 ささげばを  
 業の魚を買  
 女房のたまひ余



きんちや  
 凧  
 子肉破れぬ飯の  
 おれ小ぬりあふ  
 何ぞろこ重儀の  
 十左衛門といふを方ぐ△

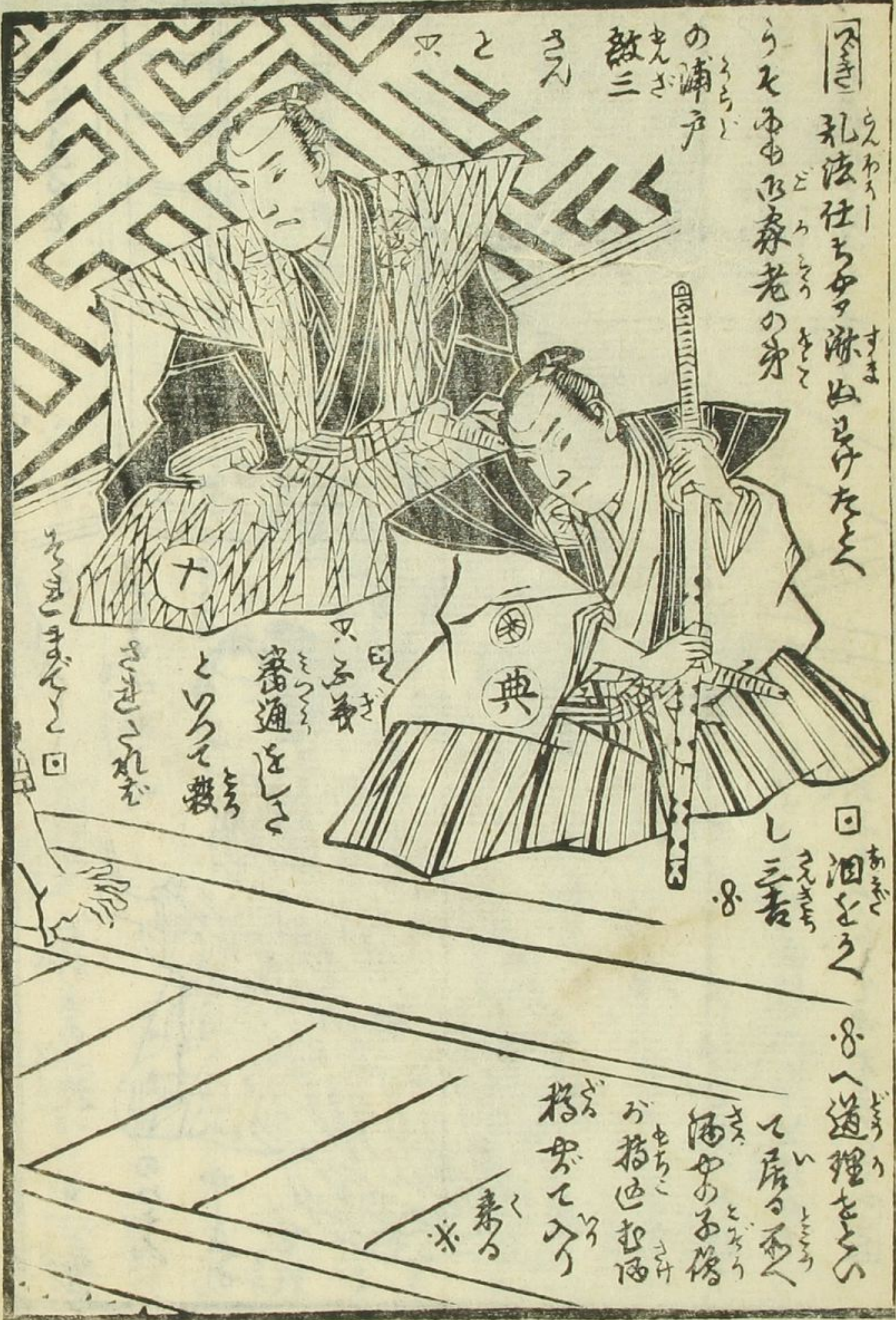
送てらるる心

凧  
 凧の又姑とん

へよりお目小  
 止つて後でえきあふつぎ引之  
 て錦ぬるるあり飯さぬのお積り  
 けん業曜透して恩を思フ  
 お子討ふあつくと所をまて



【入】 礼法仕ちや淋ぬ身なと  
ら七中由森老の身  
の浦戸  
三  
と  
と



日酒を之  
し  
八  
八へ道裡を  
て居る  
酒中の子傍  
が指さむ  
格也  
\*

又  
番通を  
とつて  
とつて  
とつて



※ 船方の方おきぎ  
あげさ下うてあま  
お森の悪人悪人  
あつてさ  
さ  
その意の叶ぬ  
意教とさ  
教さぬさ  
采種を笠と打刺りて

料とあせし  
そのさ  
田  
の

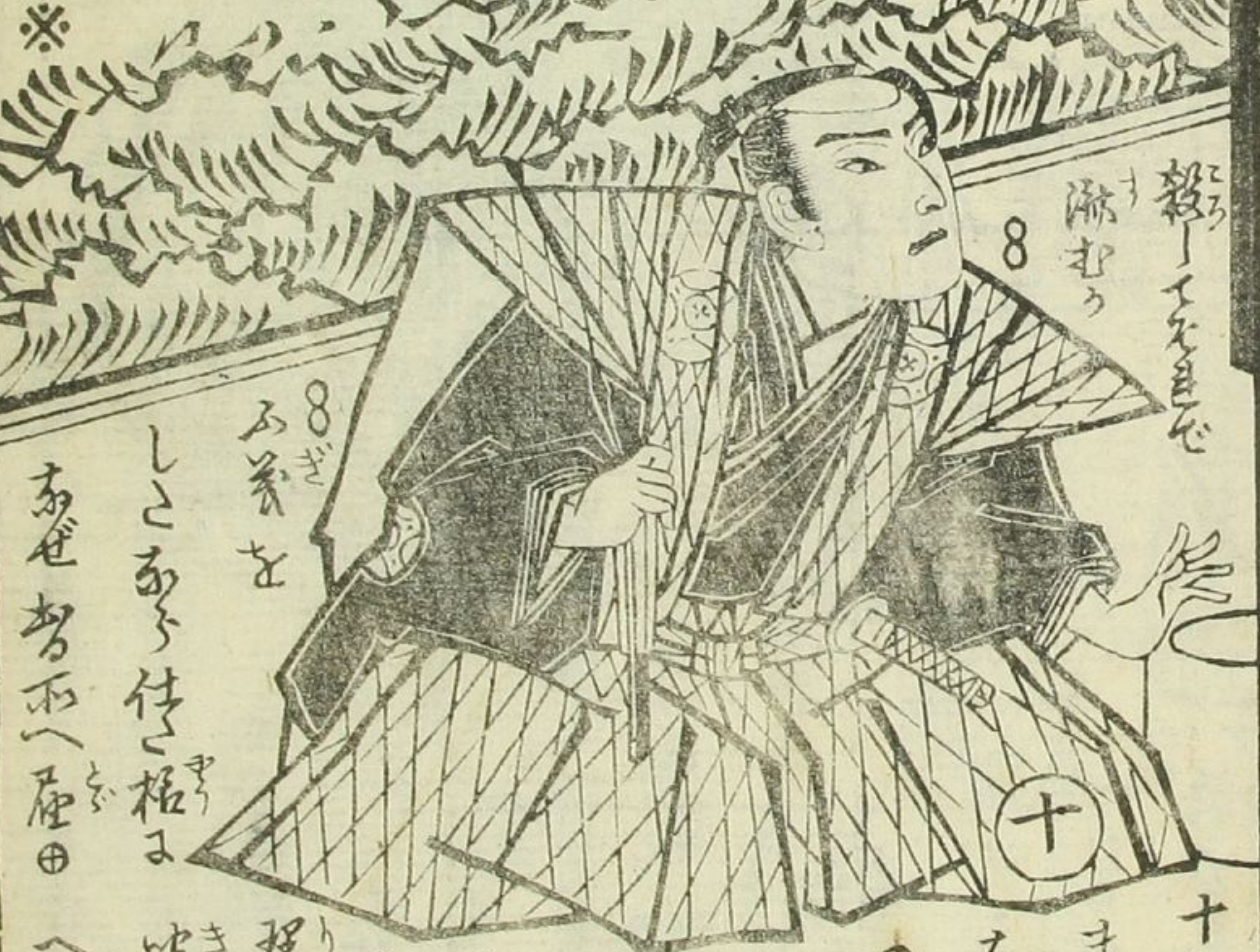


ついでに家坊  
と成すといふ  
しるす物後  
是を宗吾  
郎へたま  
至兼  
さあきふ  
さけ小指  
来せし酒を  
兼成を分と  
吾に金ひら  
さぬ一生涯



けしあそふと  
けさの上を天下  
の仕をうけぬ  
のさあきふと  
る大井小東  
あり左の典  
さう狗小一  
つらんとて  
か控らんとて  
かふるよ  
志途  
とつる

飛酒をさる  
ん飛由やがさる  
とある上の中さへは  
うけ振りたの程屋を  
いさふ中あふぬへといせん  
の初小引之を無法たす  
くいつちし女房のあふ  
とありたひ中さきをはし  
ていそくく○極部の中さ  
の雲間芳酒橋さげし宗吾  
あそ酒の力を仮初の中見  
と名のつくばあさふ只一云の\*



十たふん  
まうと由  
あそ酒具  
の上湯赤  
へ兼也  
宗吾子  
碎の光  
とるその  
とく  
上を地と  
程解を中  
さきせ  
まハ  
へ山七





なき 何事もあんひん

またる斗ひ

こと

お

家

の

ふと

お

め

の

の

の

改三郎儀ふ

宗

お

の

の

の

の

の

の

の

の

の

夜かくりて吾を典

奇買ある

のたびくあき

を函師

庵とりのゆのを

せんぎまる

あんと

毒業個合

はじりあどつ

いふ状

吾を



心

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

義のわめい

切

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

吾を

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の



の息をとりて... 魂をとりて...  
 三吉... 浦敷...  
 浄書...  
 山本平吉...



明治十六年五月十一日御届  
 山本平吉  
 新渡戸二番地

# 赤穂義士百人一越

柳下亭種員著

豊國有造画

厚中本一冊

近刻

## 繪姉妹少女見草紙

曾文作

白養美人香

## 玉菊物語

國輝画

山本平吉板

## 若葉梅窓名探櫛

梅蝶樓國真書

## 椿説鬼魅談語

九編

梅蝶樓國真書

西遊記  
北太郎  
鬼高傳

十編十編の初



